様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０３１２８

研究課題名（和文）紀元千年の皇帝権とキリスト教終末論

研究課題名（英文）Imperium of the Millenium and the christian Eschatology

研究代表者
三佐川　亮宏（Misagawa, Akihiro）

東海大学・文学部・教授

研究者番号：２０２３９２１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、（1）皇帝オットー3世（980-1002年）の「ローマ帝国の改新」政策と（2）紀元千年前後の時期における終末論の高揚、という2つの問題について、長らく議論されてきた双方の相互影響関係の解明を対象とした。成果としては、①オットーが996年の皇帝戴冠以降に試みた「ローマ帝国の改新」という政治的構想の背後に「終末論」の思想的影響を読み取ることは可能である。ただし、19世紀以降喧伝されてきた「紀元千年の恐怖」なるものは、あくまでも近代の研究者によって構築された「神話」であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の特徴は、EUの成立を背景とする超国家的性格の普遍的形象への再評価という新たな動向を踏まえつつ、「紀元千年」のヨーロッパについて、政治史およびキリスト教的救済史の観点から初めて総合的に考察したことにある。これまで我が国の研究では、問題の重要性は認識されつつも、異なる分野の主題として扱われるのが実情であった。しかし、世俗的と理解されてきた「政治」と救済史上の終末論・黙示論という「宗教」の密接不可分な関係を明らかにすることで、一個の歴史的世界としての「ヨーロッパ」の理念的地平に新たな認識の可能性を切り拓き、旧来の政治史中心に理解された歴史像を相対化したことに本研究の意義が存する。

研究成果の概要（英文）：There has been much controversy over the relationship between concept of the "Renovatio Imperii Romanorum" of Emperor Otto III. (980-1002), and apocalyptic eschatology. My research argues as a conclusion that apocalyptic thought played a important role in political concept of the "Renovatio" since his emperor-coronation in the year 996, but that the so-called " terrors of the year 1000" is one of the typical "myths", a pure construction of scholarship in 19. century.

研究分野：ドイツ中世史

キーワード：紀元千年　オットー3世　皇帝権　ローマ帝国　終末論

１．研究開始当初の背景

画期としての「紀元千年」の重要性を申請者が強く認識するに至ったのは、博士論文（2011年）をベースとする『ドイツ史の始まり ── 中世ローマ帝国とドイツ人のエトノス生成』（創文社 2013年）、『ドイツ ── 起源と前史』（創文社 2016年）を執筆する過程においてであった。この2冊の著作では、カール大帝期から12世紀半ばまでの約350年を対象に、普遍的・キリスト教的な「中世ローマ帝国」を枠組みとするドイツ人の民族形成の複雑なプロセスを考察した。その際、特にキーパーソンとして再評価の必要性を強く感じたのは、オットー朝（919-1024年）の第3代皇帝であるオットー3世（980-1002年）であり、彼が試みた「中世ローマ帝国」を枠組みとするヨーロッパ・カトリック諸国の再編・統合、すなわち「ローマ帝国の改新」政策であった。

ただし、いずれの著作においても十分議論を展開できなかったのは、こうした政治的刷新の試みが、同時期に高揚するキリスト教的「終末論」（後述）のいかなる影響を受けていたのか、という問いかけであり、この認識が本研究の出発点となった。

２．研究の目的

以上の研究状況に鑑みて、「紀元千年の皇帝権とキリスト教終末論」について、（1）皇帝オットー3世の「ローマ帝国の改新」政策によるヨーロッパ=カトリック世界の再編・拡大の試み、（2）紀元千年前後の時期における終末論の高揚、この 2 つの要素の相互影響関係を政治史・キリスト教的救済史の複合的観点から考察することが本研究の課題となった。そして、(1)（2）の研究を通じて、「キリスト教ヨーロッパ」の歴史的基礎としての中世ローマ帝国の歴史的境位を総合的に確定することを、その最終的目標に定めた。

３．研究の方法

本研究は、上記の問題認識に基づいて、そのアプローチの方法として、具体的に3つの主題について考察・解明することを掲げた。

① 「ローマ帝国の改新」政策に関するシュラムの古典的研究（1929年）、およびウーリルツによる精緻な史料批判（1955、1957年）を、最新の研究動向を踏まえつつ、新たな「改新」像を提示すること。
② いわゆる「紀元千年の恐怖」の実在性について、研究史の整理をおこないつつ、主要な論点の整理、史料的根拠の確認に努める。また、「終末論」の高揚を、同時代の個々の史料に即して広く渉猟していく。
③ 上記の（1）（2）の主題の相互間の因果関係については、様々な憶測は提起されているものの、検証に耐えうるだけの客観的にして本格的な実証研究がまだなされていないのが現状であるオットー3 世の政策は、同時期に見られる東方系のギリシア的隠修士運動、あるいはクリュニー修道院に象徴される教会改革運動の精神史的地平と密接に関わっており、皇帝自身の政治的行動のみならず、直接・間接に皇帝と側近たちに関わる史料、特に皇帝証書における「最後の審判」への言明や、側近たちの終末論意識、各種黙示文学作品の伝承、さらに多数伝わっている図像史料を網羅的に引証することで、両者の接点を明らかにしていく。

４．研究成果

本研究では、(1) 皇帝オットー3世（980-1002年）の「ローマ帝国の改新」政策と（2）紀元千年前後の時期における終末論の高揚、という2つの問題について、長らく議論されてきた双方の相互影響関係の解明を対象とした。成果としては、次の3点を挙げることができる。

① オットー3 世（皇帝証書における「最後の審判」への言及）とその周辺の知識人（オーリャックのジェルベール、ケルン大司教ヘリベルト、クリュニー修道院長オディロン他）で成立した各種の史料からは、紀元千年前後の時期に一部知識人の間で、終末論をめぐる意識の高揚状況が確認される
② オットーが996年の皇帝戴冠以降に試みた「ローマ帝国の改新」という政治的構想は、この「終末論」の思想的影響と密接な関連性を有していた。すなわち、彼が996年の皇帝戴冠以降、折に触れておこなった異例とも言える数々の瞑想的・禁欲的な贖罪行為、モンテ・ガルガーノ、グネーゼン他への贖罪巡礼、アーダルベルト、ネイロス、ロムアルドゥスらの隠修士たちへの精神的傾倒、メールゼブルク司教座再興の試み、カール大帝崇敬とアーヘン新司教座構想、そして「ローマ帝国」を基盤とする東部ラテン=キリスト教世界の再編・統合。これら一連の行動、あるいは998年に初出する「ローマ帝国の改新」という政治的構想の背後に、当時皇帝周辺で高揚していたであろう「その時」への恐怖と希望の影響を読み取ること

は可能である。

③ ただし、19 世紀以降喧伝されてきた「紀元千年の恐怖」なるものは、あくまでも 16 世紀以降初めて定着した「世紀（*saeculum*）」による時代区分をベースに、近代の研究者（ミシュレー他）によって構築された「神話」であり、当時の精神的状況を反映してものではない。

以上の成果の詳細は、最終年度に『紀元千年の皇帝 ── オットー三世とその時代』（刀水歴史全書、95）（刀水書房　2018 年）に教養書という形でまとめられた。また、本研究の中心的史料については、「メールゼブルク司教ティートマル（1009-1018 年）と『年代記』── 人と作品」において紹介した。『年代記』については、本研究と並行して翻訳を進め、既に下訳は完成している。科学研究費・研究成果公開促進費の交付を申請し、採択された場合その刊行を予定している。

最後に、本研究の前提となった『ドイツ史の始まり ── 中世ローマ帝国とドイツ人のエトノス生成』（創文社 2013 年）が、2018 年度第 108 回日本学士院賞を授与された。授与式は、2018 年 6 月 25 日に日本学士院で挙行された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 三佐川亮宏「メールゼブルク司教ティートマル（1009-1018 年）と『年代記』── 人と作品」『東海大学文学部紀要』109、2019 年、35-72 頁

② 三佐川亮宏ハンス=ヘニング・コーテューム、三佐川亮宏訳「オットー・ブルンナーとナチズム―「時代を巧みにくぐり抜けて来ました」」（上・中）、1136、2018 年、110-131 頁。1138、2019 年、68-87 頁。※（下）は 1142 号（2019 年 6 月）に掲載予定

③ 三佐川亮宏　書評 Joseph Lemberg, Der Historiker ohne Eigenschaften. Problemgeschichte des Mediävisten Friedrich Baethgen, [Campus Historische Studien, Bd.71], Campus Verlag, 2015.『西洋中世研究』10、2018 年、244-245 頁④

④ 三佐川亮宏　書評 Anastasia Brakhman, Außenseiter und 'Insider'. Kommunikation und Historiografie im Umfeld des ottonischen Herrscherhofes, [Historische Studien, Bd.509], Husum, Matthiesen Verlag, 2016.『西洋中世研究』9、2017 年、169-170 頁

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 2 件）

① 三佐川亮宏『紀元千年の皇帝 ── オットー三世とその時代』（刀水歴史全書、95）、刀水書房　2018 年

② コルヴァイのヴィドゥキント、 三佐川亮宏訳『ザクセン人の事績』知泉書館　2017 年

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
毎日新聞インタビュー記事「中世ドイツから見る現在」（2018 年 5 月 1 日）：毎日新聞 HP
http://mainichi.jp/sp/tokaism/opinion/con82_1.html

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。